

尾 川 正 二

極限のなかの人間

— 極 楽 鳥 の 島 —



国際日本研究所

尾 川 正 二 (おかわ まさつぐ)

1917年生まれ。京城大学国文科卒業。広島大学研究科修了。現在関西学院大学講師。日本文学協会・表現学会会員。主要論文：「中世歌学思想の展開」「方丈記論考」「中国文学における孤独感」他。

〔極限のなかの人間〕

昭和四十四年五月二十五日
昭和四十五年四月二十五日
第一刷発行
第三刷発行

定価五〇〇円

著 者 尾 川 正 二

発行者 国際日本研究所
中 北 暘 三

印刷者 堀 内 文 治 郎
東京都千代田区三崎町二

発 行 所 西宮市仁川
五ヶ山五ノ二四
国際日本研究所

〒662 電話 西宮 五一―一八七二
振替 神戸 一五九九七

発 売 元 東京都千代田区
一番町一七―三
株式 創 文 社

〒102 電話 東京 三三―七二〇(代)
振替 東京 九二四七二

(落丁・乱丁本はお取替えします)

〔堀内印刷・橋本製本〕

彼は望み得ないのに、
なおも望みつつ信じた。

序に代えて

忘れるさびしきにもまさって、忘れうる幸いを喜ぶべきものは、戦争の現実である。にもかかわらず、二十数年間も篋底に秘めていて、ようやく世に出すことを決意した尾川兄の、祈りにも似た悲願に、深い感動を覚える。人間の耐えうるぎりぎりの極限を体験した彼の精神と肉体とが、忘れうる幸いを拒否して、あえてこの決意に達したかどうかは、知るよしもない。だが、二十数年間の沈黙を守り通した気持も、私には痛いほどわかる。すべて「人間」を否定したところに、戦争はあるからである。

原子爆弾によって荒廃した広島の一隅、宇品の山寮然とした仮設の校舎で、尾川兄との最初の出会いはいつくられた。死の島ニューギニアから、第六部の記述にあるように「二百六十一分の一」のその一名という、まさに奇跡的な生還をされ、一年有余の病床生活のうちに、稀有の体験をつづり、やや体力を養いえて、教壇に立たれたころであった。ニューギニアでの熾烈な体験を、ことは少なく語ってくれたこともあったが、それは、私も中支と比島で戦塵を浴びた一人であったため、いわゆる戦友の語らいともいうべきものであった。おたがいに、ことは数は少なかった。それは、ことばを超えた世界の体験であり、暗黙のうちに、それぞれの「戦争」を理解しえていたからである。

一般に、攻めるは易く、守るは難いといわれ、なかんずく転進作戦または退却は、至難とされている。尾川兄は、ニューギニアで、そのもっとも悲惨な敗退を体験されたのである。飢餓と暑熱と悪疫と弾煙とに責めさいなまれて、人間の耐えうる限界を遙かに超えた環境において、潔癖で内省的な彼が、よくも生き通せたものだと思われる。生きえたということは、おそらく彼が学生時代に、心身を鍛えたことにもよるものであろうが、

私は、もっと大きな理由がなければならぬと考える。

彼に奇跡的な生還をさせたものは、何であったのか。それは、彼が多くの戦友に愛されていたからではないのか。そして、彼もまた、深く戦友を愛していたからではあるまいか。そう確信しうるものを、私は、この手記のなかに感ずるのである。それは、時間空間を超えて、われわれの「生きる」問題にかかわるものではなからうか。したがって、彼のテーマは「あとがき」にあるように、「戦争とは何であるのか」ということと、「人間そのもの」にある。ところどころに、中国戦線の回想が挿入されているのも、そのためであらう。彼の視点は、人間にのみ注がれているといつてよい。そこに、単なるルポルタージュをこえた、人間凝視の深さがあり、ある意味で人間学たりえているのではないだろうか。

昭和四十三年十二月八日

西 治 辰 雄

目次

序に代えて

西治辰雄

第一部 序幕

- 1 座 礁 五
- 2 遺 書 九
- 3 原始林にて―ウエワク― 一三
- 4 桃源境 一七
- 5 危機のかげに 二一
- 6 ゴム林にて―マダン― 二五
- 7 出 撃 二九
- 8 光と闇 三三
- 9 狂 乱 三六
- 10 会 戦―フィンシハーフェン― 五三

第二部 転進

- 1 ガリの転進―第一次山越え― 五九
- 2 続転進―第二次山越え― 六六

3	原隊復帰
4	彷徨

第三部 人と人

1	戦場の倫理
2	自然児とともに
3	人を愛するということ
4	暗い山小屋
5	ある兵の死
6	ピアビエの韜晦
7	Y軍医という人
8	M伍長の死
9	わが墓穴
10	アユスの周辺
11	T曹長の死―土民の反撃―
12	生死の岐路
13	極限におけるエゴ
14	裸の「人間」

第四部 戦野

八四	六〇
九七	九
一〇三	一〇六
一〇九	一一二
一一三	一一九
一二三	一二四
一二六	一二九
一三一	一三四

1	幾山河	二五
2	孤愁	一四
3	爆撃	一五
4	時空の間隙	一七
5	死の影	一六
6	飢餓	一六
7	奈落	一七
8	逃亡	一七
9	危し「人間」	一七
10	指揮官	一八

第五部 自然と人間

1	雨	一九
2	蚊と蟻と	一九
3	極楽鳥	一九
4	舞踏	一九
5	安息のなかに	二〇
6	信仰	二〇
7	「タロ」とサクサクと	二〇
8	大僧長	二〇

第六部 終戦

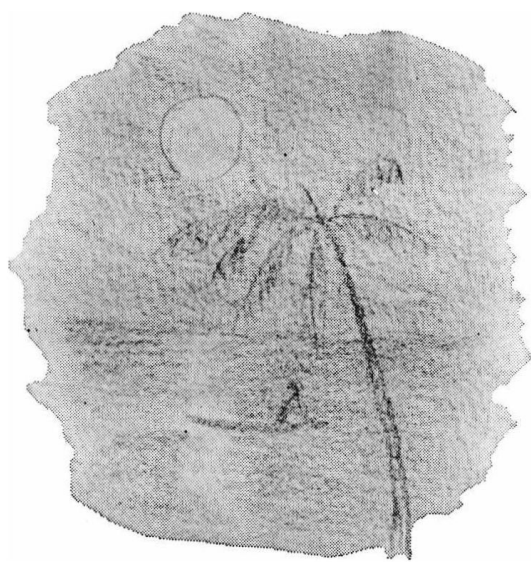
9	土俗寸描	二一
10	ことば・言霊	二五
11	たばこ・ウイスキー	二八
12	いのちと豚と	二九
13	子どもの世界・女の一生	三三
14	信号	三七
15	倫理	三〇
16	流れる雲と	三三
1	玉碎宣言	三七
2	流言	三三
3	戦争と人間	三六
4	処刑	三九
5	髑髏隊	三五
6	武装解除	三五
7	配流—ムツシュ島—	三四
8	奴隷	三五
9	人間模様	六一
10	自由	六九

11	帰鳥	二七四
12	権威と秩序	二七六
13	二人の老人―浦賀港―	二八〇
14	浦賀検疫所	二八二
15	召集解除	二八四
16	廃墟―広島―	二八六
	あとがき	二八九

極限のなかの人間

— 極楽鳥の島 —

第一部
序
幕



東部ニューギニア
(Eastern New Guinea)



1 座 礁

紺青の海は、次第に深さを失って、平板な粘体に見えてくる。釜山港出航以来、五日を過ぎた――。

パラオ。珊瑚礁でできたこの島々は、潮に浸蝕されて、大小の独楽のように浮かんでいる。一望のうちにおさまれた風景は、さながら仙境である。ジャンクがゆったりと往き来して、わずかに人間の介入を許している。

拔錨。依然として南へ南へと進路を消化している。遠く近く、魚の群れが、きらきらと海をもち上げている。飛魚が、きちきちと羽を鳴らして戯れる。

ガダルカナルか、ニューギニアか。茫々とした大洋をひた走る。駆逐艦が小さな船体をつんのめらせながら寄り添う。人影が、波をかぶっているのが見える。対潜監視は頭上遙か、マストの天辺に眼を光らせる。

何事もない、静かな航海である。だが、一人一人の胸は、そこはかとない不安にゆらめいている。日一日と、厳冬の装いを剥ぎとられ、熱帯の空氣の重さに圧倒されてくる。折り重なるようにつめこまれた船艙は、奴隸船を連想させる。入口の標識は“Baggage Room”なのだ。人間の寝起きするところでは、そもそももないのだ。臭気と熱気のなかの、それは一種もの悲しい荷物だった。急遽とりつけられた大きな吹き流しのような通風のまわりに、群がる金魚のようにあっふあっふしている。冬服を脱ぎ捨て、支給された薄物に衣更える。その防暑服に、「サイトウ・アキコ」という名が縫いとられており、あえかな故国への糸を感じさせた。

快晴。

曇天。

スコール。

海霧——。

天象の変化に応じて、われわれの感情も彩られていったが、「戦争」の重石を断ち切ることはなかった。自由な海も、われわれを自由にはしなかった。

快晴。空の青、海の青、「肺青きまで」蒼茫とした「船の旅」である。軽いエンジンの音も、宇宙の鼓動を思わせる。船首は未来を切り、船尾は過去を引きずる。航跡の白い泡沫は縞模様の帯となって、記憶をつなぎとめる。青さをなめつくした眼には、海は滑らかな一枚のじゅうたんとなって盛り上がってくる。オトタチバナヒメノミコトが降り立った「菅疊八重・皮疊八重・きぬ疊八重」は、そのまま海の形容ではなかったかと思われる。引きこまれるような誘惑さえ感じられる。極大の視界も、無限に向かって突きぬけてゆくことはない。のしかかってくる重さが、放心をさまたげるのだ。

海霧。乳色の帳だ。いびつにゆがんだ船体は、紡錘形の平面となって、落ちつきのない運動を始める。しゅうしゅうと波を引き裂く音、エンジンの音も重い。極小の視野のなかの安らぎと不安との怪しい混淆——。

いろいろな想定のもとに、絶えず訓練はつづけられてゆく。敵前上陸・繩梯子による岩壁登攀・甲板上の駆け足……。魚雷をくらったら、あわてず水筒一本持って甲板に上がれ、空ならば浮き袋の代りになり、水がはいっておれば飲料となるのだ、という。合理的ではあるが、知恵の限界もそこまでである。魚雷に対処すべき手だてが、水筒一つなのだ。水筒をもって、海に浮かんでいる図は想像できる。だが、それから、どうなるのか。魚雷など、決してくもらないという前提を信ずるほかはない。

ごろごろと、倦怠とから陽気のうちに日は過ぎていった。たわいもないさざめきは、大きな不安から強いて眼をそらそうとする擬態でしかなかった。絶えずさざ波を立てながら、おたがいの連帯感を確かめあっていたといっているだろうか。